

子供の頃の足羽川河原よ、今一度よみがえってはくれないものか。私はどうしても子供の頃の足羽川河原を忘れることができません。

特別展
報 告

予見が適中した薬草展（一次展）

従来、わが館の展示で一番の不人気は植物部門であった。それでも秋にはきのこの展示に人だかりがあり、また、たった10点の薬用植物コーナーに人影が多いのを見て、興味と関心の所在を痛感するのだった。時あたかも漢方ブームとあって、今年度に予定されていた植物の特別展は薬草で、と考えたのま2月である。見事にその予見は当たった。会期中（10/6～11/9の35



好評を博した「飲んでみませんか」コーナー

日間)はどの日も、展示のひとつひとつに見入る多数の来館者の眼の熱っぽさに驚くほどだった。

当初、郷土の薬用植物は残らず採集しようと決意し、いろいろの文献をあさって、300種収集の目標を立てた。各種の採集適期を逸してはと、雪どけの4月早々からの採集である。特別展開始の10月6日ぎりぎりまで採集が続き目標を突破して320種に達した。会期中も続行してさらに20種を加えたが、まだ幾多取りこぼしがあることを残念に思っている。

収集は、薬用植物の基本標品だけではない。生薬標本も大量多種展示したい。それに目玉商品の「飲んでみませんか」の40日間をまかなう7種の生薬収集は並大抵でない。開幕前3ヶ月はしばしば土日返上して、かなりの量の展示生薬70余種も完成した。

特別展に先立つPR活動も大事な仕事である。6月には60余人を集めて、路傍の薬草を調べる会を博物館周辺で催し続いて館内で煎薬の接待と特別展予告で、大変な好評と期待感が醸し出された。8月からは館前に薬草の鉢植20余鉢を展示して、これを特別展開催のいきたポスターとし、来館者の目をひいた。地方紙が、ひたむきなわれわれの活動のいろいろを取材してくれたことも有難い威力あるPRとなった。

特別展のテーマは、「薬草を見直そう」であった。さらに次の小テーマを設定してコーナー別標題とした。

- (1) この植物にこんな効めが(薬効別展示)
- (2) 手軽に集った生薬70余種(生薬収集のすすめ)
- (3) 味を試そう・においを試そう(煎薬服用の体験)
- (4) 効くとはいうが危険な薬草(安易な薬草使用の戒め)
- (5) ニューフェイスの花粉公害(季節毎の気管支喘息犯人)

予想の通り薬草に関心の深い人々は、婦人層と老人層であった。そして何か一病に悩む人たちである。この人々の求める薬草を想定し、特に10種類の薬効パネルに集約した。洞察の通りでこのコーナーに一番の人だかりが多く、1〜2時間をかけて熱心に勉強する人も少なくなかった。各パネルには6種の薬草を組み込み、各種に薬用部分、使用方法等の説明を加えた。特に関心の深いパネルには、老人病関係のもの、消化器関係のもの、強壮補精関係等で、パネルと生薬を交互に観察してノートする人がほとんどで、かつての特別展に見られなかった異様な程の光景であった。

展示場が狭く340種の展示は不可能で、100余種をいろいろの形で提示し、他は来観者の求めに応じて公開する500余点の集積展示コーナーを設けた。(事後に薬草ライブラリーを作る予定を立てている。)

特色を誇る企画に、「飲んでみませんか」のコーナー設定がある。箱火鉢に炭火ならぬ赤電球を点灯し、この火鉢を炉に仕立てた。ここに煎薬の大薬罐を掛けて常時に温めておいた。この炉辺には数人の車座が絶えなかった。赤い火と薬湯に心も和み、薬草談に花が咲く毎日だった。私もその仲間入りをしては、様々の話の中から二次展への模索を続けた。(二次展3〜4月)

準備物はおしば600点生薬70種液浸標本(草根)30点パネル15点その他70点で、借用購入は皆無であった。案内状やポスターに至るまで総て手づくりの簡素さ、総経費5万円は材料費で消えた。

天候不順の秋には入館者が疎らなのが例だが、今年はこの特別展で5,100人を吸収し、中には4・5回も足を運ぶ来観者10余名を数えるほどだった。今次の薬草展だけは、見流しの来観者は無く、長時間粘る人の多いこと、そして心からの挨拶で立去っていく多くの人々の反応に、苦勞も忘れ、腹ふくれる思いだった。

(館長 小林貞七)

付 記

この記事は、全国科学博物館協議会発行の全科協ニュースの編集者からの要請によって投稿し、同誌の新年号に登載されたものである。

薬草一次展・二次展共に好評を博し、両展を通じ一万数千の観覧者があった。二次展では一般からの強い希望もあって、薬草要覧を印刷した。千部の要覧が短期間に配布されてしまった。当初本誌にも転載の予定であったが、紙面のつごう上割愛することにした。

本年3月以降も採集を続け、400種に近くなった。ライブラリーの利用もしばしばである。